

# メディアの影響研究に基づく コンテンツ評価 -メディア教育への応用-

筑波大学大学院図書館情報メディア研究科  
鈴木佳苗

# はじめに：日本の状況

## □ 社会的背景

- ・近年、テレビ番組の暴力描写が青少年犯罪の原因の1つに挙げられている
- ・日本では、1990年代後半に、バタフライナイフを使った殺傷事件が続けて見られた
  - テレビドラマの主人公の影響を受けたのではないかという指摘
  - テレビ番組の悪影響への懸念が強められることとなった

# テレビ番組の暴力描写を捉えるための 「暴力行為」の定義

「単独または複数の人物またはそれに類する  
擬人化されたキャラクターに対し、  
身体的な被害をもたらすことを意図して、  
切迫した脅威を与えたり、実際に暴力を  
ふるったりする行為」

# アメリカの状況とこれまでの実証研究

## □ アメリカの状況

- 1950年代後半からテレビ番組の暴力描写の影響に関する問題が議論されており<sup>(1)</sup>、数多くの研究が行われてきた

- 実験研究<sup>(2) (3)</sup>
- 縦断調査研究<sup>(4) (5)</sup>
- メタ分析<sup>(1)</sup>

テレビ番組の暴力描写は短期的、長期的に人々の攻撃性の学習を促進するといった悪影響を及ぼす場合があることを示唆

# 暴力描写の文脈的特徴を捉える必要性

- 全ての暴力描写がすべての人に同じような影響を及ぼすわけではなく、視聴する内容によって、攻撃性の学習が促進される場合も、抑制される場合もある<sup>(6)</sup>
- どのような内容の暴力描写が視聴者の攻撃性の学習を促進あるいは抑制するのかを検討するためには、暴力描写の数を単純に集計するだけでは充分でなく、それぞれの暴力描写の文脈的特徴を捉える必要がある



内容分析研究のコード

# 攻撃性の学習

## □ テレビ暴力における社会的学習理論<sup>(7)</sup>

### (観察学習理論)

- ・人々は、周囲の人たちの行動を見て学習することと同様に、  
メディアで描写されたモデルの暴力行為を見て暴力行為を  
学習する

→攻撃性への悪影響を予測

# 内容分析とは

- テレビ番組の内容分析研究
  - ・テレビ番組が提示している情報やメッセージの1つ1つを分類したり、評価したりすることによって、テレビ番組が映し出しているものを「定量的に」把握しようとする方法
  - ・内容分析を行うことによって、1つの番組について視聴者は何回の暴力シーンに遭遇しているか、あるいは、暴力行為のうち、暴力実行者が利益(報酬)を得る場面が全体の何%あるか、罰を受ける場面が全体の何%あるかなどを知ることができる

# 暴力描写の文脈的特徴の視聴とその影響

## □ この問題を検討するための方法

パネル調査

## □ パネル調査<sup>(8)</sup>

- ・ **同じ対象者**に対して、**2時点以上で繰り返し測定**を行う調査
- ・ **変数X**が**変数Y**に**時間的に先行**している  
→ **因果関係の推定が可能**
- ・ **モデルの組み方**によって、**変数Xと変数Yの因果関係**から、**他の変数Zの影響**を取り除くことが可能

# 分析モデル例

## □ 重回帰モデル

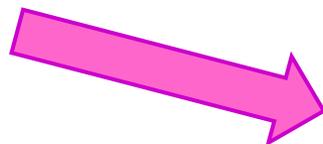
1回目調査(変数X)

各文脈的特徴  
への接触量

社会性

性別

社会的  
望ましさ



2回目調査(変数Y)

社会性

メディア利用のよい影響を高め、**悪影響を低減**するためには  
どうしたらよいか？

# 子どもたちに悪影響を及ぼす情報への対策<sup>(9)</sup>

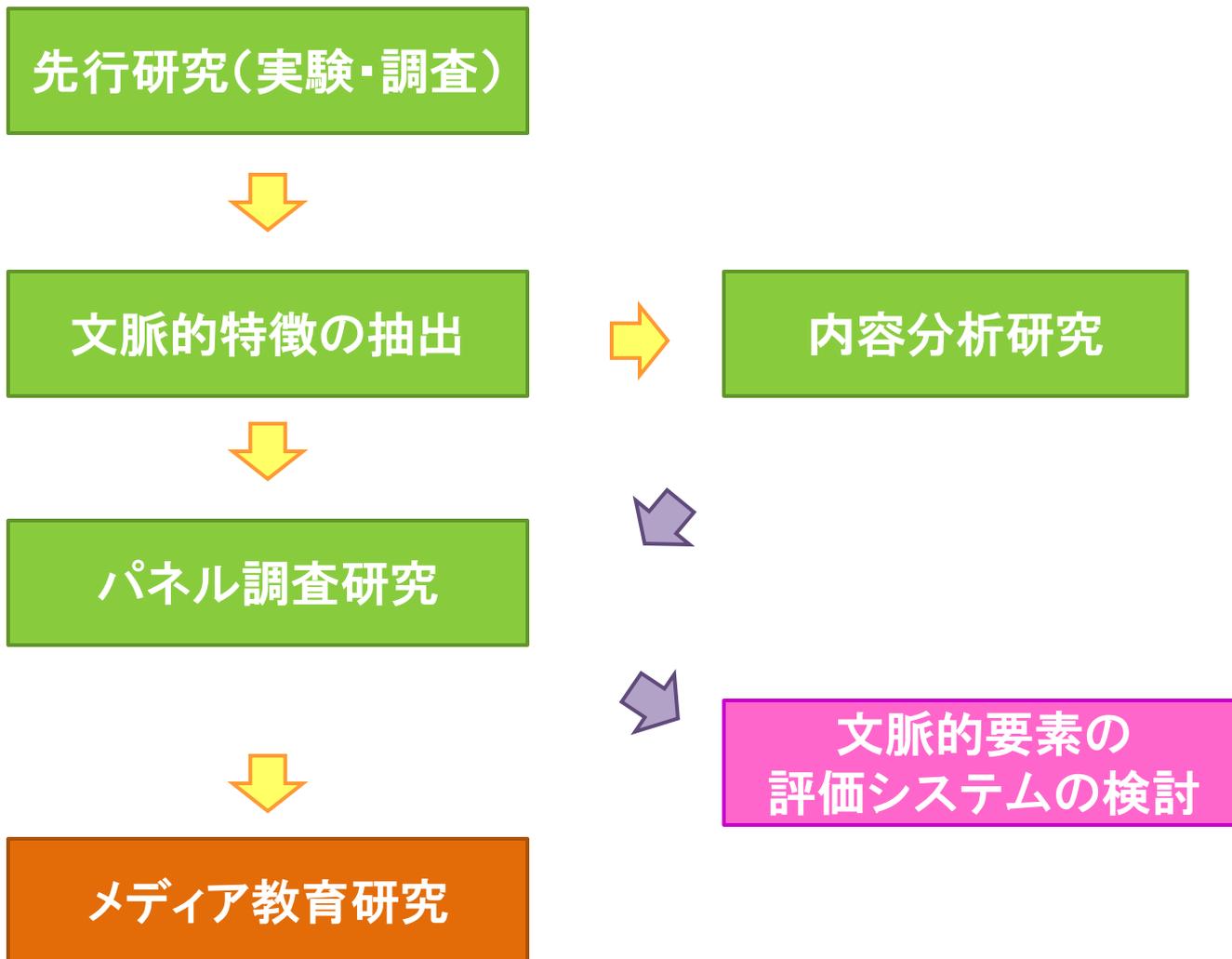
## □ メディア規制

- 1990年代半ば以降、いくつかの委員会などで議論  
(「多チャンネル時代における視聴者と放送に関する懇談会」「青少年と放送に関する調査研究会」「青少年と放送に関する専門家会合」など)
- 言論の自由 の問題 → メディア規制は難しい

## □ メディア教育

- 1999年 「放送分野におけるメディア・リテラシーに関する調査研究会」
- 2000年 報告書:メディア・リテラシーの定義

# 文脈的特徴の抽出からメディア教育までの研究の流れ



# 先行研究の結果の整理

## □ 実験研究

- ・被害描写の映像視聴の研究
- 被験者は、被害描写がある場合には、被害描写がない場合よりも攻撃的にならない<sup>(10)</sup>
- 「被害描写」は攻撃性の抑制要因

## □ メタ分析

- ・56の実験研究のレビュー<sup>(11)</sup>
- 暴力行為に武器が使われている場合には、攻撃性が高まる
- 「武器の存在」は攻撃性の促進要因

# 先行研究→文脈的特徴の抽出

## □ どのレベルで抽出するか？

→先行研究の結果をまとめた内容分析研究のコードが参考になる

□ テレビ番組の暴力描写の内容分析研究は、アメリカ、イギリスを中心に行われてきた

□ 日本では、アメリカの研究手法を参考にした研究の成果が報告されてきている<sup>(12) (13)</sup>

# 米国テレビ暴力研究

- National Television Violence Study(NTVS)
  - ・カリフォルニア大学サンタバーバラ校(UCSB)がフィクション番組の暴力描写の内容分析を実施
  - ・1994年から1997年にかけて、約10000時間、50000件以上の暴力行為(身体的攻撃)を分析(総額330万ドル)
  
- 分析レベル
  - ・NTVSの場合は、「行為」「場面」「番組」の3つのレベル

# 日本のテレビ暴力研究

- Japanese Television Violence Study(JTVS)
- NTVSのコードを参考に日本版のコードを作成
  - **分析対象番組の拡張**: お茶の水女子大学の研究チームがフィクション番組、ニュース番組、CMの暴力描写の内容分析を実施
  - **分析コードの拡張**  
(例) 身体的攻撃以外に、言語的攻撃、間接的攻撃についてのコードを作成

# NTVSおよびJTVSの暴力描写の文脈的要因(分析コード)と攻撃性への影響への予測(身体的攻撃)

## □ 行為レベル

文脈的要因	予測
手段：身体的手段	△
手段：武器（銃・ナイフ）の存在	△
程度：多量の暴力	△
理由：正当化された暴力	△
理由：正当化されない暴力	▼
被害／苦痛の描写	▼

# 文脈的特徴の抽出→パネル調査研究

- 先行研究の結果や内容分析のコードから、暴力描写の視聴についての項目を作成

(例)

- ・被害描写

「暴力を受けた人が苦しんだり痛がったりしているシーン」

- ・武器の存在

「ナイフで刺したり銃で撃ったりするシーン」

# 小学生を対象とした調査研究<sup>(14)</sup>

## □ 調査対象者

- 1回目調査: 8校の小学4年生755名  
(男子393名、女子361名、性別不明1名)
- 2回目調査: 継続的な調査に承認した6校の小学5年生586名  
(男子311名、女子275名)

## □ 分析対象者

- 2年間に継続して調査に参加した生徒は462名  
(男子239名、女子233名)

# 方法：質問項目(1)

## □ 暴力描写の文脈の視聴(9項目)

### (1)攻撃性促進要因

- ・身体的手段を使った暴力、武器(銃・ナイフ)を使った暴力、身近なものを使った暴力、多量の暴力、言語的攻撃、間接的攻撃など

### (2)攻撃性抑制要因

- ・被害描写
- ・それぞれの項目について、どのくらい見たかを「1:まったく見なかった」から「4:とてもよく見た」までの4件法で尋ねた

# 方法：質問項目(2)

## □ 攻撃性(28項目)

- ・「敵意的インベントリー尺度」<sup>(15)</sup>に基づいて作成
  - ・**身体的攻撃**：「よくけんかをする方だ」「どんな理由があっても、暴力をふるうことはない」など10項目
  - ・**言語的攻撃**：「いやなことやいじわるなことをいわれたら、かならず言い返す」「言い争いをよくする」など10項目、
  - ・**間接的攻撃**：「人がきずつくようなうわさを流すことがある」「友だちのものをかくして、こまらせることがある」など8項目
- ・それぞれの項目について、「1：あてはまらない」から「5：あてはまる」までの5件法で尋ねた

# 方法：質問項目(3)

## □ 社会的望ましさ(25項目)

- ・児童用社会的望ましさ測定尺度<sup>(16)</sup>を使用

「テレビを見ているとき、お母さんに用事を頼まれると、はらが  
たったこともありますか」

「友だちに自分のものをかすことが、ときどきいやになります  
か」

- ・それぞれの項目について、「1:はい」「2:いいえ」の2件法で  
回答を求めた

## □ 調査対象者の属性：性別、年齢、生年月日、学年、組、 出席番号

# 方法：手続き

- 質問紙(「テレビについてのアンケート」)と実施の際の注意点の資料を各学校に郵送
- 担任の教員の指示のもと、授業時間中に一斉に質問紙調査を実施
- 1回目調査は、2004年度の2学期終わりから3学期にかけて、2回目調査は、2005年度の2学期の終わりから3学期にかけて、各学校の都合に合わせて実施

# 結果：身体的攻撃性

- 攻撃性を促進していた暴力描写の文脈的特徴
  - ・言語的攻撃
  - ・身体的手段による攻撃(傾向差)
- 攻撃性を抑制していた暴力描写の文脈的特徴
  - ・被害描写

# 結果：言語的攻撃性

- 攻撃性を促進していた暴力描写の文脈的特徴
  - なし
- 攻撃性を抑制していた暴力描写の文脈的特徴
  - なし

# 結果：間接的攻撃性

- 攻撃性を促進していた暴力描写の文脈的特徴
  - ・言語的攻撃
  - ・身近なものを使った攻撃
- 攻撃性を抑制していた暴力描写の文脈的特徴
  - ・なし

# パネル調査研究→メディア教育研究

- 攻撃性を促進する文脈的要因と抑制する文脈的要因の特定

→メディア教育の1つのプログラム例:

攻撃性を抑制する要因について解説することで  
メディアを読み解く力を高めるとともに、  
社会性を高めることができるのではないか？

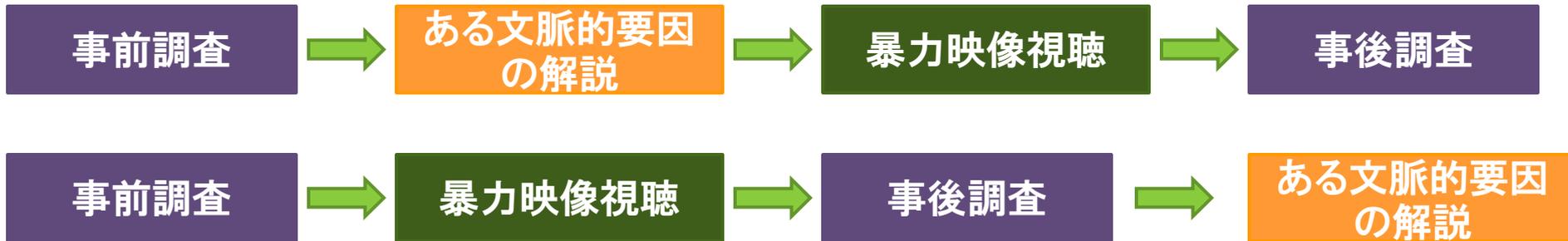
- 被害描写への注目

→アニメ番組の利用

- ・暴力描写の数が多い
- ・被害の過小描写

# メディア教育研究のデザイン

## <実験群>



## <統制群>



# 研究の難しさ(1)

## □ 内容分析研究

- ・コードの決定
- ・コストの問題

## □ パネル研究

- ・調査協力者の照合
- ・大学生以外への協力依頼

# 研究の難しさ(2)

## □ メディア教育研究

- ・大学生以外への協力依頼
- ・複数の刺激の選出
- ・長期的影響の測定

## □ 評価システム

- ・どのように重みづけするか？

# おわりに

- 実証的研究の結果は、メディア教育のプログラムに活かすことができる
- さまざまな研究の関心を持つ人たちが協同して、新しいプログラムを開発していくことへの期待